様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年　6 月　5 日現在

機関番号：24302
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2009～2011
課題番号：21653053
研究課題名（和文）　生活支援実践ツールの試行から実践導入への検討

研究課題名（英文）　Simulation and Practice by Using Support Tools of Social Work

研究代表者
中村　佐織（NAKAMURA　SAORI）
京都府立大学・公共政策学部・教授
研究者番号：80198209

研究成果の概要（和文）：
本研究の目的は、ソーシャルワーク実践で実用可能な生活実践支援ツールを作ることにある。そのための研究方法は、文献研究と支援ツールの開発から行った。その成果としては、エコスキャナー（コンピュータ）の改良と試行がある。また、もう一つは、ソーシャルワーカーのスキルアップのために活用する独自な教材開発を行ったことである。これに関しては、現在、すでに研修で活用している。

研究成果の概要（英文）：
The purpose of this study is to create tools that can be practical in Social Work Practice. For research methods that were carried out from literature research and development of support tools. As a result, there is a trial and improvement of the (computer) Eco-scanner. In addition, another is that unique material has been developed to utilize skills for social workers. In this regard, currently, has been already utilized in training.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,400,000	0	1,400,000
2010 年度	900,000	0	900,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	3,000,000	210,000	3,210,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学
キーワード：ソーシャルワーク、社会福祉援助技術、ソーシャルワーク支援ツール

１．研究開始当初の背景

本研究は、平成 19 年の「社会福祉士及び介護福祉士法」の大幅な改正により、更なる専門職養成教育の質的充実が唱えられるようになったことと関係している。具体的には、申請者が研究代表となって採択された平成 20 年度から平成 23 年度科学研究費補助金の「ソーシャルワーク教育における研修方法とプログラムの開発に関する研究」（研究代表者：中村佐織、基盤研究Ｂ）の社会福祉実習指導者や実習・演習担当者への教育と彼らが実施していくために必要な教育プログラムに結びつくツール・教材研究となっている。

また平成 14 年度から平成 16 年度科学研究費補助金の「社会福祉援助技術演習におけるコンピュータ教育支援システムの研究」（研究代表者：中村佐織、基盤研究Ｃ－１）や太田義弘・中村佐織・石倉宏和編著『ソーシャ

ルワークと生活支援方法のトレーニング利用者参加へのコンピュータ支援』中央法規平成17年なども本研究の基盤となっており、新しい研修方法の一つとして不可欠なコンピュータ支援ツールの開発に寄与してきた。このように、養成教育現場でもまだ十分に着手できていないソーシャルワークの支援ツールの開発と実践での導入は、非常に挑戦的な研究となっている。それは、コンピュータとの関係だけでなく、現場で活用するワークシートや記録様式、あるいは自身のスキルアップに不可欠な演習教材や事例（このことについてはケース記録の書き方とセットと考えている）など、即改良していくものにも十分な検討がなされていないのが現状である。

２．研究の目的

そこで、本研究の目的は、まだそれほど研究が進んでいないこの分野において、まずソーシャルワーカーの活用する支援ツール（コンピュータ・ツールも含む）の新たな開発と改良を行うことを目的とした。そのことは、今後のソーシャルワーカーの効率的・効果的な支援と専門性の向上に影響を与えると考えられる。そこで、それらを実践で活用可能にするための多面的な検討と導入の可能性のための課題の整理を行なうことを目的とした。

そのため、以下の課題に取り組むことで新たな生活支援実践ツールの試作と完成を目指したいと考えた。

（１） エコシステム研究会が作成した教育支援ツールの問題や課題の整理
（２） わが国や諸外国におけるコンピュータ・ツールの開発状況の把握と分析
（３） 各実践領域におけるツールの質問項目に関する精査
（４） コンピュータ・ソフトやアニメーション・ソフトについての先駆的研究からの検討
（５） ツールの改良点に関する現場のソーシャルワーカーやエコシステム研究会での協議
（６） コンピュータ・ツール以外の生活支援ツール（紙媒体のツールやＤＶＤなど）の検討
（７） 現場での試行をもとに生活支援ツールの開発と導入方法の提案

３．研究の方法

社会福祉の分野では、かなり新しい視点からの研究（支援ツールとしてのコンピュータ開発）も考えているので、次の５点の研究方法で進めていくことにした。

（１） 先駆的な生活支援実践ツールに関する先行研究（他領域の先行研究も視野に）
（２） コンピュータと連動してアニメーション・ソフトに関する情報収集
（３） 研究分担者（山口真里ら）がエコシステム研究会ですでに実施しているコンピュータ支援ツールの検討からの示唆とエコシステム研究会でのディスカッション
（４） 多様な生活支援実践ツールの開発と要素の吟味
（５） それぞれのツールの試行（実践での活用の可能性の検討）

４．研究成果

まず 21 年度は、先行研究の渉猟を行い、この領域の研究の必要性が唱えられているのもかかわらず、ほとんどないことを明らかにした。そのうえで、制度・政策の改正や現場のソーシャルワーカーの専門性が問われるなか、その専門性を高めるために実践支援ツールの必要性は求められていることを改めて実感した。

そこで、このような状況をふまえ、基礎研究から始めて次のような成果を示した。

（１） 先行研究によるツールの状況

エコシステム研究会の協力を得て、①分担研究者の西梅幸治がコンピュータ教育支援ツールの質問項目の検査を実施し、妥当性を検証した。しかしまだ検査数が不足していることもあり、今後も検査の継続を予定している。また②分担研究者の菊池信子は、家族領域での実践支援ツールの検討のため、その領域の歴史研究と事例研究を進めていった。

さらに③分担研究者（山口真里）は、エコシステム研究会のメンバーとともに、チーム・アプローチのコンピュータ実践支援ツールの質問項目の精査を高知市や広島市の実践者の協力を得て行なった。そして研究代表者は、④他領域の先行研究（教育学、心理学、リハビリテーション学など）を渉猟し、活用ツールの比較検討を行った。

（２） 生活実践支援ツールの多様なソフトの可能性

従来のコンピュータ支援ツールのソフトに関しては、グラフでしか表示できなかったので、その部分のアニメーションをグレイドアップさせたいと考え、①アニメーションの学会に参加し情報を得ることにした。具体的には、２年間にわたり、日本デザイン学会（名古屋）、アニメーション学会（西宮）に参加した。ここでは、研究者メンバーが直接ソフト開発の示唆を得るということでなく、人材発掘を考えていた。しかし適切な人材をいまだ見つけられず、継続中である。

これ以外に、21 年度は、②ＤＶＤ作成（郵便局会社近畿支社・人権啓発室）で、構成・

脚本・出演を行い、ＤＶＤをツールとして活用していく可能性を得た。

（３）　コンピュータ支援ツールの試行効果

研究分担者（山口真里）が中心に行ってきたチームアセスメントのコンピュータ支援ツールに関しては、①質問項目の精緻化（現場のソーシャルワーカーとの協働）、②現場（高知市）での試行とその後の評価まで行うことができたところである。

（４）　多様な生活支援実践ツールの吟味

コンピュータやＤＶＤに関しては、本研究期間内で十分実践で活用可能なものができるかが不安要素もあったため、並行してワークシートや現任教育に活用可能な紙媒体の支援ツールについても検討してきた。この点に関しては、特に直接支援に活用するものより、間接的に現場のソーシャルワーカーのスキルアップや専門性向上で実施された研修教材の開発を行った。①具体的には、オリジナルな教材、ワークシートを用いた演習、事例作成とその展開プログラムづくりを行った。

②また、この試行の場として、全国社会福祉協議会主催の社会福祉主事研修（年７回）、神戸市の市民後見人研修（平成 23 年７月）、京都市福祉職員人権研修（平成 24 年２月）、亀岡市人権研修（平成 24 年３月）で試行を繰り返し、データの蓄積を行った。

③これらの検証の結果の多くについては、平成 23 年度北海道ブロック社会福祉士養成教育研修会（平成 24 年２月、於札幌市）に招聘された時に、「相談援助実習後における相談援助演習の展開と課題」というテーマで講演し、紙媒体の生活支援実践ツールの内容を紹介した。

（５）　それぞれの支援ツールの試行からの実践展開の可能性

コンピュータ支援ツールに関しては、検証の積み上げができてきたので、実践での活用に可能性が出てきた。また現任のソーシャルワーカー教育に関する教材開発については、最終年の試行をふまえて、実用可能となったと考えている。また実践展開のなかでは、現場のソーシャルワーカーが自身での事例作成と記録用紙や様式を工夫することが重要になる。そのためには、その作成のノウハウが必要不可欠である。そこで研究代表者編で研究分担者も執筆している『教える人と学ぶ人のためのソーシャルワーク演習』（ミネルヴァ書房　平成 25 年 1 月出版）が、ソーシャルワーカー固有の支援ツールを実践展開させる礎となると考えている。

そもそも本研究は、まだ始まったばかりであり、特にコンピュータの支援ツールに関しては国内外でも先駆的に研究に邁進してきた。十分とはいえないが、試行段階にまでこぎつけたことは、大きな成果といえよう。また紙媒体の演習教材キット（ビネット・エクササイズ・ワークシート・事例など）は、オリジナルで作成し、実際の研修・演習で活用しているところである。今後は、さらに試行と評価を繰り返し、実用性と汎用性を課題に取り組んでいきたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

① 西梅幸治「ソーシャルワークにおけるエンパワメント実践の基本特性　―生活・支援・過程に着目して―」『高知県立大学紀要』61　査読有　2012 年　pp. 69-84

② 菊池信子「日本のソーシャルワーク支援の方法論展開　―家族と地域の視点から―　1990 年代以降の動向とソーシャルワークのアプローチの適用について」『神戸親和女子大学福祉臨床学科紀要』第９号　査読無　2012 年　pp. 9-19

③ 菊池信子「日本のソーシャルワーク支援の方法論展開　―家族と地域の視点から―　1980 年代家族支援の傾向とソーシャルワークのアプローチの適用について」『神戸親和女子大学福祉臨床学科紀要』第８号　査読無　2011 年　pp. 21-29

④ 太田義弘・西梅幸治「エコシステム構想をめぐる手法と支援ツール　―ソーシャルワーク実践へのチャレンジ―」『総合福祉科学研究』２　関西福祉科学大学　2010 年　pp. 1-14

⑤ 中村佐織「ソーシャルワークとは何か」『総合リハビリテーション』第 38 巻第９号　査読無　2010 年　pp. 849-854

⑥ 中村佐織「みんなにやさしい職場を目指して～ハラスメント・ゼロへのアドバイス～」(DVD) 株式会社郵便局近畿支社　人権啓発室　査読無　2010 年

〔学会発表〕（計１件）

① 中村佐織「ソーシャルワーク教育における新しい方法に関する研究（５）　―演習教員の能力育成に向けた課題―」日本ソーシャルワーク学会第 28 回大会　2011 年７月３日　川崎医療福祉大学

〔図書〕（計２件）

① 菊池信子編著『福祉実践をサポートする介護概論（第２版）』保育出版社　2012 年　196 頁

② 菊池信子編著『福祉実践をサポートする介護概論』保育出版社　2011 年　196 頁

６．研究組織

(1)研究代表者

中村　佐織（NAKAMURA SAORI）
京都府立大学・公共政策学部・教授
研究者番号：80198209

(2)研究分担者

菊池　信子（KIKUCHI NOBUKO）
神戸親和女子大学・発達教育学部・教授
研究者番号：00204834

西梅　幸治（NISHIUME KOUJI）
高知県立大学・社会福祉学部・講師
研究者番号：00433392

山口　真里（YAMAGUCHI MARI）
広島国際大学・医療福祉学部・講師
研究者番号：70441566

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：